Future Beauty:

30 years of Japanese Fashion

【展覧会開催のお知らせ】

公益財団法人　京都服飾文化研究財団 (KCI)
2010 年 10 月

展覧会概要

京都服飾文化研究財団（KCI）は、
「Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion」を
バービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）2010 年 10 月 15 日～ 2011 年 2 月 6 日
ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）2011 年 3 月 4 日～ 6 月 19 日
に於いて開催いたします。

20 世紀後期以降、世界に注目され、明確な位置を築いてきた「Japanese Fashion」をテーマとした「Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion」展は、現代の日本文化において最も魅力的で、独自性を持ったジャンルの一つである日本のファッションを多角的に検証する、初めて日本から発信する大規模な展覧会です。

1970 年代の高田賢三や三宅一生らの活躍に導かれて、1981 年、パリにデビューした川久保玲や山本耀司の作品は〈前衛的〉と評され、その表現に賛否両論が飛び交いました。
平面性、素材の重視、無彩色など、三宅、川久保、山本の作品を特徴付ける表現は、西欧的な文脈に捉われない美意識でした。しかし、それが抗いがたい強さと正当性を備えていたことは、やがて「Japanese Fashion」が世界で、明快かつ確固たるポジションを獲得したことによって証明されます。「Japanese Fashion」は西欧的な美意識の絶対性への再考を促し、それに導かれて、ファッションは新たな地平へと踏み込んでいきました。
現在も、渡辺淳弥、高橋盾、栗原たお、そしてさらなる新たな世代を加えて、「Japanese Fashion」は、世界性を持ち続けています。

KCI は早くから創造性豊かな日本人デザイナーの活動に注目し、その作品収集に注力してきました。KCI のコレクションから精選した作品を中心に現代の日本を代表するデザイナーの作品約 130 点と、映像、写真、印刷媒体などによって構成される
「Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion」は、20 世紀後期から今日までの日本ファッションの魅力の全貌を改めて照射するものです。
展示デザインは、気鋭の建築家、藤本壮介氏が担当します。

開催概要

題名：Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion

■ロンドン会場

会場：バービカン・アート・ギャラリー／バービカン・センター 3F
会期：2010 年 10 月 15 日（金）～ 2011 年 2 月 6 日（日）
休館日：12 月 24 日（金）～ 26 日（日）
開館時間：11 時～ 20 時　月曜日、木～日曜日
　　11 時～ 18 時　火曜日、水曜日
入場料：10 ポンド（一般）

主催：バービカン・アート・ギャラリー、公益財団法人京都服飾文化研究財団
協力：株式会社ワコール
協賛：株式会社資生堂、株式会社米国ワコール、英国ワコール株式会社
助成：財団法人朝日新聞文化財団
メディア・パートナー：The Daily Telegraph, Dazed and Confused

キュレーター：ケイト・ブッシュ（バービカン・アート・ギャラリー）
　　深井晃子（公益財団法人京都服飾文化研究財団）

■ミュンヘン会場

会場：ハウス・デア・クンスト
会期：2011 年 3 月 4 日（金）～ 6 月 19 日（日）
休館日：無休
開館時間：10 時～ 20 時（木曜日は 22 時まで）
入場料：有料

主催：ハウス・デア・クンスト、公益財団法人京都服飾文化研究財団
協力：株式会社ワコール
協賛：株式会社資生堂
助成：独立行政法人国際交流基金

キュレーター：クリス・デルコン（ハウス・デア・クンスト）
　　深井晃子（公益財団法人京都服飾文化研究財団）

出展作品（予定）

■衣装

約 130 点

公益財団法人京都服飾文化研究財団
株式会社三宅デザイン事務所
株式会社ヨウジヤマモト
有限会社ミントデザインズ
株式会社アンリアレイジ

出展デザイナー

三宅一生、川久保玲（コム・デ・ギャルソン）、山本耀司、
渡辺淳弥、高橋盾（アンダーカバー）、栗原たお（タオ・コム・デ・ギャルソン）、
阿部千登勢（サカイ）、小野塚秋良（ズッカ）、大矢寛朗（Oh! Ya?）、勝井北斗＋八木奈央（ミントデザインズ）、丸龍文人（ガンリュウ）、坂部三樹郎、高島一精（ネ・ネット）、高田賢三（ケンゾー）、滝沢直己（イッセイ・ミヤケ）、立野浩二、津村耕佑（ファイナル・ホーム）、中章、廣川玉枝（ソマルタ）、堀内太郎、堀畑裕之＋関口真希子（まとふ）、皆川明（ミナ・ペルホネン）、森永邦彦（アンリアレイジ）、等

■写真

畠山直哉によるコム・デ・ギャルソンの出展作品のイメージ 6 点

■映像

出展作品のコレクション・ショー等

■印刷媒体

カタログ、DM、パンフレット等

構成

①　In Praise of Shadows（陰翳礼讃）

川久保玲と山本耀司は、1980 年代初め、黒を中心とした無彩色、非構築的な、破れやほつれを施した、西欧の美意識から外れた作品を発表しました。この時、多義的な意味を含む黒はみすぼらしさと直截的に関連付けられて、日本ファッションは「Beggar look」とあだ名され、黒は日本ファッションの代名詞となりました。

しかしそれは、川久保が 80 年代末その本来の優れた色彩感覚を現したように、多彩な色が溢れる当時のファッションに対するアンチテーゼ、意図的な提案でした。彼らの色彩はしばしば、谷崎潤一郎が『陰翳礼讃』で語る、あるいは墨絵にも似た黒の極めて豊かな階調表現でした。男性服で一足早く黒が日常の色となった後、20 世紀後期、黒は女性服にとっても時代の色となったのです。

②　Flatness（平面性）

「Japanese Fashion」はしばしば、フォルムがない、と評されます。それは、日本人デザイナーが西欧的な衣服構成から解き放たれて、平面的な構成を自由に操ることができたからです。日本の着物もそうである平面的な構造は、世界各地に見られますが、これを現代服に昇華させたのは、三宅一生、川久保玲らの造形力でした。

平面的な構造の服は、オーバーサイズ、非定形、非対称で、女性の身体を際立たせる西欧的な形を持ちません。このいわば、身体を合理的に彫塑しない服は、身体に沿わない不合理な空間、〈間（ま）〉を生みます。しかしそれは、身体の線とかけ離れた自由なフォルムを生むことにもなりました。西欧的な秩序である構造性の欠如の中に、逆説的に構造を打ち立てる、換言すれば脱構築的な行為。それは、ファッションを服飾造型の新たな次元へと導いたのです。

③　Tradition and Innovation（不易流行）

素材に対する日本人デザイナーの鋭い感性は、当初から西欧に高く評価されるものでした。三宅、川久保、山本らは既成の素材に依存せず、テキスタイルデザイナーとの協働により独自に素材を開発して独自性のある服を作っており、その姿勢はより若い世代の渡辺淳弥、まとふ、ミント・デザインズらにも明確に見られます。

こうした姿勢とそれを具現化する日本の繊維産業の関係は、世界でも他に例を見ません。伝統的な高度な着物文化が育んだ染織技術、素材に対するこだわりは、第二次大戦後に発達した化合繊産業の時代となっても受け継がれました。日本人デザイナーは天然繊維と化合繊を等価の材料として扱い、そこに、これも日本が先導する先端テクノロジーによる多様な加工技術を加えて、新しい表情や質感、さらには新しい機能性をも生み出しています。日本ファッションは、デザイナーの創造力と日本の伝統が交差した地点で生み出されました。

④　Cool Japan（クール・ジャパン）

現在、世界中から注目を集めている日本のポップ・カルチャー。そのキーワードとなる「カワイイ Kawaii」は世界語となり、今やもっとも「cool」な言葉の一つとなっています。「Cool Japan」とも評されるこの新たな日本熱において注目を集めているのはマンガやアニメ、ゲームなどのサブカルチャーと、その影響を強烈に受けた「ロリータ」や「ゴスロリ」に代表される日本の若者のファッションです。大衆文化からの影響、子供趣味、過剰な装飾、バッド・テイストに彩られた彼らの感覚は、村上隆ら現代アーティストや栗原たお、高橋盾など若い世代のデザイナーの作品にも色濃く現れ、その世界的な評価につながっています。

「Japanese Fashion」とは決して単一の現象ではありません。個々のデザイナーがそれぞれの価値観や美意識を持ちながら独自の表現で新たなファッションを求めてきた、さまざまな活動の総体です。その多様性こそが、新しいシステムを模索する現代ファッションが日本に熱く注目する大きな理由の一つではないでしょうか。

⑤　Designers（デザイナーズ）

ブランド別の展示によって、代表作から最新作までそれぞれのデザイナーの創造性により深く迫ります。また、現在活躍中のデザイナーの作品をより幅広く紹介します。

三宅一生、川久保玲（コム・デ・ギャルソン）、山本耀司、
渡辺淳弥、高橋盾（アンダーカバー）、栗原たお（タオ・コム・デ・ギャルソン）、
ネクスト・ジェネレーション（阿部千登勢（サカイ）、坂部三樹郎、高島一精（ネ・ネット）、中章、廣川玉枝（ソマルタ）、堀内太郎、森永邦彦（アンリアレイジ））、勝井北斗＋八木奈央（ミントデザインズ）

展覧会カタログ

題名：Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion
編集：バービカン・アート・ギャラリー
編集協力：公益財団法人京都服飾文化研究財団
出版社：メレル・パブリッシング（ロンドン）
言語：英語
頁数：256 頁
発行：2010 年 10 月
予定価格：35 ポンド
内容：論稿

「Future Beauty: 30 years of Japanese Fashion」
深井晃子（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）
「The Empire Designs Back」
バーバラ・ヴィンケン（ミュンヘン・ルートヴィヒ・マクシミリアン大学教授）

ショート・エッセイ
「Issey Miyake」「Rei Kawakubo」「Yohji Yamamoto」「Junya Watanabe」「Tao Kurihara」
スザンナ・フランケル（ファッション・エディター）
「The Receptiveness of a Red Circle on a White Background」
原研哉（グラフィック・デザイナー）
「The Next Generation」
栗野宏文（株式会社ユナイテッドアローズ上級顧問　クリエイティブアドバイザー）

出展作品のイメージと作品解説（京都服飾文化研究財団）
年表

関連企画 （予定）

■バービカン・センター（ロンドン）

① 2010 年 11 月 1 日（月）、8 日（月） 於：バービカン・シアター
演劇「春琴」 演出：Complicite（サイモン・マクバーニー）
谷崎潤一郎の『春琴抄』『陰翳礼讃』を基にサイモン・マクバーニーが脚本・演出

② 2010 年 11 月 6 日（土）
「バービカン・コスプレ」 午後 6 時から深夜 1 時までのコスプレ・パーディー

② 2010 年 1 月 27 日（木）
堀口裕之＋関口真希子（まとふ）によるレクチャー

等、多数。（※バービカンのウェブサイトより「Future Beauty Events Leaflet」 がダウンロードできます）

■ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）
未定（同時期開催展として、現代アーティストのエルスワース・ケリーの個展を予定。）

開催美術館について

①　バービカン・アート・ギャラリー

Barbican Art Gallery
Barbican Centre, Silk Street London, EC2Y 8DS, U.K.
http://www.barbican.org.uk/

近現代美術、建築、デザイン、ファッションなどの分野において活発な動きを見せるロンドンで、それらをクロスオーバーした話題性の高い企画展で知られるアート・ギャラリー（美術館）。英『タイムズ』紙は 2008 年、「英国で最も運営に優れ、展示の評価も高いアート・センター」と評しています。

バービカン・センターの一部門として、コレクションは持たず、ギャラリー（1,400m^2）で企画展示を中心とした活動を行っています。近年の主な展覧会は「Martian Museum of Terrestrial Art」、「The House of Viktor & Rolf」等。また、「Japan and Britain」、「JAM: Tokyo-London」、「Araki」、「Alvar Aalto: Through the Eyes of Shigeru Ban」など、現代日本に関わる企画展を積極的に開催してきました。

バービカン・センターは 1982 年に完成し、美術館、映画館、劇場、図書館等を含むヨーロッパ最大級の文化施設。運営はロンドン市が行っています。

© Barbican Centre

②　ハウス・デア・クンスト（芸術の家）

Haus der Kunst
Prinzregentenstrasse 1, 80538, Munich, Germany
http://www.hausderkunst.de/

先鋭的な現代美術の企画展を次々と繰り出す注目の現代美術館。

2003 年、気鋭の現代美術キュレーター、クリス・デルコンが館長に就任。これまでに、アイ・ウェイウェイ、アニッシュ・カプーア、アンドレアス・グルスキー、ゲルハルト・リヒターといった世界の第一線で活躍中の現代アーティスト、さらには、マルタン・マルジェラなどコンセプチュアルなファッション・デザイナーの企画展を開催。

1930 年代のドイツを代表する建築物である壮大な美術館は複数の展覧会場から成り立っており、それを自在に操りながら、大規模な空間を活かした大胆な展示を行っています。

Haus der Kunst. Fassade Süden mit Sprachskulptur von Lawrence Weiner
Foto: Jens Weber, München

展示デザイン：藤本壮介氏

藤本壮介氏［1971- ］は、自然と人工物の狭間にある新しい形と空間への探求心によって世界から更なる進化を期待される気鋭の建築家です。

1994 年、東京大学工学部建築学科を卒業後、2000 年、青森県立美術館設計競技で 2 位を受賞して注目を集め、同年、藤本壮介建築設計事務所を設立。

2005 年を皮切りに、若手建築家の国際的な登竜門である AR Award を、2006 年度最優秀賞を含めて 3 年連続で受賞。一躍世界的に知られるようになり、2008 年には同賞の審査委員を務めています。

さらに同年、JIA 日本建築大賞と World Architectual Festival 個人住宅部門最優秀賞を受賞。『Architecture Record』誌の “Design Vanguard” に選出され、同年出版された『原初的な未来の建築 Primitive Future』は、2008 年の建築書のベストセラーに輝きました。建築界だけでなく、NHK の「トップ・ランナー」出演などによって、一般からの注目も集まっています。

出展作品画像 （一部）

［上段左より］
山本耀司　ドレス　1983 年春夏
川久保玲（コム・デ・ギャルソン）　ドレス　1983 年秋冬
川久保玲（コム・デ・ギャルソン）　ドレス　2008 年春夏
［中段左より］
渡辺淳弥　ドレス　2004 年秋冬
高橋盾（アンダーカバー）　ドレス　2000 年秋冬
勝井北斗＋八木奈央（ミントデザインズ）　ドレス　2008 年秋冬
［下段］
堀畑裕之＋関口真希子（まとふ）　ドレス　2008 年秋冬

（京都服飾文化研究財団所蔵、上段中央：畠山崇撮影、下段：林雅之撮影、その他は広川泰士撮影）